わい

全作品と講評

WWW.COLUMNLAND.NET

(´・ω・`)

欧米人がWhy?と言いながら手の平を上に向けて困っている様子

現代の日本において、『日本語の崩壊』は凄まじいスピードで進んでいる。安直な略語や文法を無視した言葉が横行し、日本語は着実に本来の姿を失っている。『言葉なのだから、使いやすくて相手に伝われば問題ない』と言われればそれまでではあるが……。

今から数年前、巷で流行した(?)言葉で『ＫＹ』というものがある。『ＫＹ』とは『空気が読めない』の頭文字を取った略語であるが、その使われ方には目に余るものがある。

日本人は『空気を読む』とか『行間を読む』と言ったような、目に見えない雰囲気のようなものを察したり、相手の気持ちや意図を汲むことを良しとする生き物であるのは確かだ。しかし、『ＫＹ』の使われ方はこうだ。その場において、『空気』を読めなかった人間に対して『お前はＫＹだ』と平気な顔をして言うのである。しかも、その『空気』とやらはかなり恣意的なものである。

空気を読むとは、決して強制されるものではなく、自分の意思で、自分の判断で行動を起こすことである。それを『ＫＹ』という一言であたかも自分が正しいかのように他人を強制することが、あってよいのだろうか。正しいことを言わんとして水をさしたにも拘わらず、それを『ＫＹ』だと一蹴される。『ＫＹ』が使われるようになった当初、そんな風潮があるように私は感じた。

間違ったことに否と言わず、他人の『空気』に迎合することなど必要ない。『空気』の存在を恐れることはない。『ＫＹ』と言われても水をさすべきだ。

徹底検証:もしアルファベットの「Y」が無くなったら

☆busy→bus
忙しい人はブスになります……じゃなくてバスに乗らなくてはいけません。

☆belly→bell
腹部(belly)がベルになります。つまり、みんな常にお腹が空いて、ベルのように鳴りっぱなしになります。

☆gays→gas
ゲイの人は気体になってどこかに飛んで行ってしまいます。

☆yours→ours
「お前のものはみんなのもの、みんなのものはみんなのもの」という、スーパージャイアン主義ならぬスーパー共産主義が生まれます。そして、この世のすべては共有財になります。

☆YAHOO!!→AHOO!!
かの有名な検索ポータルサイトが「阿呆!」とかなり間抜けなことになります。

☆test→test
泣いても喚いても試験はなくなりません。

☆TOKYO→TOKO
東京が東京工業大学(略して東工)の人々に乗っ取られてしまいます。東京工科大学の人々もちゃっかり便乗してきます。

結論:「Yって大事だ。」

別れる路と、交わる路

雪が降るには少し遅く、桜が咲くには少し早い、そんな三月中旬の今日この日。
ブレザーの胸ポケットに入った和紙はいわゆる送辞が書かれたもので、つまり今日は卒業式だった。
送辞を贈った、つまり私は今期の生徒会長であって、前期の副会長だった訳なのだけど。
そんな私は卒業式の喧騒から遠く、人気の無い住宅街である人を待っていた。
耳に届く、こつこつと革靴が地面を打つ音。そこに、学ランに身を包んだ前生徒会長、支倉隼人先輩がいた。
「……卒業、おめでとうございます。支倉会長」
「――ありがとう。それと、『元』会長、だよ」
私のその言葉に、会長は少し驚きながらも答えた。いつものように、私の「間違い」を正しながら。
「学校のどこにもいないと思ってたけど、ここだったのか。何か話があるのかな」
その言葉に小さく頷く。話がある、と言うには言いたいことはまとまってないけど、この人と話したいのは事実だった。
「……会長、本当に、これで卒業、なんですよね」
「元、会長だよ。――そうだよ、今日からは君たちが最上級生だ。ほら、そんな顔しない」
こつん、と卒業証書が入った筒で私の頭を小突く会長。私はどんな顔をしていたのだろうか。
「僕は、君だから、君が会長を継いでくれるから、何の憂いもなく卒業できたんだから、自信を持って」
そうは言っても、私にとって、この人はいつまでも生徒会長で。そして、私にとっての私は、この人の副会長なのだ。
すごく陳腐な言葉で言えば、自信がない。この人の背中を追い続けて、だけど追いつけてない私に、会長なんて務まるのか。
「……ふむ。それじゃあ、一つ話をしようか」
……話？　会長のそんな言葉に、思わず首を傾げた。そんな私を見ながら大きく頷く会長。
「ほら、見て。ここは僕たちの分かれ道。いつものY字路だ」
すっと腕を上げて、人差し指で指し示すその先は、私達がいつも別れていた分かれ道がある。
「僕はね、人生っていうのはこんなY字路がある道みたいなものだって思ってるんだ」
「人生が……Y字路のある道？」
「そう、Y字路。僕らはここで別れて、僕は右、君は左に帰って行くよね。人生もそれと同じ。今まで同じ環境で、同じ人生を生きてきた人だって、いつかはこんなY字路に差し掛かって別れることになる」
そう言った会長は、学校からの道をY字路に向けて指でたどる。
「この道が、僕と君が同じ学校で過ごしてきた人生。それでこの先、こっちが僕の、そして君はまた別の道を進む」
「……つまり、別々の人生を歩まざるを得ないから、いつまでも頓るなってことですか」
「違う違う。ポイントは『Y』字路ってところ。人生はY字路であって、『T』字路じゃないんだよ」
……？　何が違うんだろうか。違う人生に進むって言うなら、YでもTでも関係ないような気がするけど。
会長は微笑みながら、首を傾げる私の頭を軽く撫でる。
「Y字路はね、Tの字みたいに真横に分かれるんじゃない。僕たちの人生は、確実に同じ方向に進んでるんだ」
「私の人生も……会長の人生と同じ方向に……」
跡を追うのではなく、別の道に突き放されるのでもなく、私と会長、その行く末は同じ方向を向いている。
それは、私にとっては思いもよらない言葉で。会長とは違って、でもどこかしら同じで。
そんな言葉が、私の胸の奥に染み渡っていき、そして、一つの答えを見つけた。
「僕が言えるのはそれだけ。それをどう受け止めるかは君次第だ」
ぽんと私の肩を軽く叩き、会長はY字路の右の道へと歩いて行く。
「……会長！　さようなら！」
「……元会長、だよ。さようなら、またね」
そんないつも通りの言葉を背中に投げかけ、そして帰ってきた答えもまた、いつも通りのものだった。
人生はY字路のある道。そして、私は支倉『先輩』と同じ未来へと少しずつ進んでいる。
そして、先輩は気付いてないのかもしれないけど、人生がY字路で別れるってことは、その別れた人生が今度は逆向きのY字路で交わることもありえるんだ。丁度、この通学路の分かれ道が、少し先でまた合流しているのと同じように。
「待っててくださいね、先輩、元会長。また人生が合流した時に、あなたの隣に胸を張って立てるように、私、頑張りますから」
誰に告げるでもなく、そう言葉を残して、私は左の道を行く。この道の先が、先輩の道と繋がっていることを信じて。

「アルファベットによる人間の精神活動の考察」

次の文字列を見ていただきたい。

W X Y

これが何を表すかおわかりいただけただろうか？
そう、女性の体である。

ただのアルファベットの羅列であっても何を表しているのかを捉えることができる。
これは人間特有の、いや、人間にのみ与えられた高尚な能力と言ってもいいだろう。

このような単純な記号でも人の体を構成していると認識できるのならば、より複雑な図形、つまり絵ならばより複雑でレベルの高い妄そ…いや、精神活動ができるに決まっているのだ。つまり何が言いたいかというと俺の嫁がいくら画面から出てこないからってたかが二次元だと馬鹿にするのはちゃんちゃらおかしいのである。恋する相手が二次元であっても、否、二次元であるからこそ、我々のこの優れた能力を駆使することができ他の生物との格の違いを見せつけ、あっ、ちょっやめて電源を落とさないでええええええええええ……

出会いのY

期末試験を明日に控えたとある日の帰路、ふと目に入った駅前のカフェに入っていた。
疲れたときには、こうやって好きな音楽で耳をふさいで、頬杖片手にぼーっとしながらコーヒーをすする、そして気づいたら何時間も経ってる。そんな日々の一コマが僕のちょっとした贅沢な一時なんだ。
明日明後日の試験なんて気にしない。
どうせ帰っても勉強しないから。

ふと携帯を見るとメールが一件入っていた。「元」恋人からだ。明日CD返せるとのこと。僕は、ふーんと心の中で悪態をつきながら、気だるそうに携帯を睨んで、頬杖の手を入れ替えた。
アイツと別れてからもうすぐ半年、生活の一部だった彼女がえぐっていった傷が、ようやくかさぶたくらいになってきたというのに。

このザマだよ。

恋人という肩書きが解消さてからも、つかず離れずの関係が続いてる。
他愛もないメールをしたり、CDを貸すという名目で一緒に帰ったり。
触れない。お互いに、どう思ってるかとか、これからどうしたいのか、とか。僕らの関係にストレートな言葉はタブーだから。
きっと二人共不安なんだ。近くにいた分だけ傷つけあったあの頃が消えてくれなくて、それでも会いたくなっちゃう自分との葛藤。どうすりゃいいのよ。
一応出しておいた独語の教科書。YNisikoriさんが書いたのか。
僕らの関係もYの字みたいに二手に別れて戻らないはずだったのに。
でもほら、反対から見たらなんか2つの道が1つになってるみたいだろ？
女々しい発想に変な笑いがこみ上げてきて、僕は口角を上げて残ったコーヒーを飲み干して外に出た。
駅につくと終電が終わってることに気づいて更に笑いが止まらなくなった。

白色矮星より

我々は母なる星を旅立たねばならなかった。

遠い先祖が思いを馳せた神話の宇宙。古代よりソラに全知全能の存在を見、深遠なる無限に畏怖を覚え、こうしてその世界に繰り出した今でも、孤独と真正面から向き合うだけの強さは持ち合わせていない。

かつて我々は、上空から降り注ぐ豊かな光からエネルギーを取り出し、あらゆる知識、あらゆる精神的なものを手に入れた種であった。肉の身体は科学の発達に伴い機械に取って代わられ、朽ちる機械は朽ちぬエネルギー体、電磁波へと変化をした。身体は時代と共に進化したが、精神だけは変わらなかった。

我々は親であり子であり、個であり郡であり、一であり全であった。しかし種としての孤独は、悪魔のようにまとわりついた。

我々の発展を支えた太陽、母星が太古の昔から一定周期で回り続けているものは、肉の身体に収まった祖先にとっては永遠であった。しかし、無限の時間を生きる存在となった今、それは有限の時間であった。

形あるものは朽ちる。

長い寿命を終えた太陽は、エネルギー源を失い、白色矮星となった。我々は徐々に冷たくなっていく太陽の傍らに生きることを諦め、新たな住処を求めた。温かく優しい光の届く別の銀河へと、母なる星を後にした。

何万年、何億年と宇宙を旅し、銀河を渡った。その多くは太陽から程良い距離の惑星に原始的な弱い息吹の生命が申し訳程度に生息するのみで、高度な知性を持った生物にはなかなか出会えなかった。そもそも、電磁波として情報を持つ生命体であるため、ある程度の文明でなければ観測されないのである。

あるとき、母星から二百億光年ほど離れた若い銀河のある惑星から乱雑に放たれる電磁波を受け取った。放たれる電磁波は高度な文明の証である。我々は嬉々としてその惑星の表層をさらった。

彼等は未だ肉の身体に入った精神であったが、眩いばかりの太陽と、我々を知覚できるだけの文明を有していた。我々は孤独を癒すためにあらゆる方向からコンタクトを試みた。テレビジョンなるものに干渉すれば「のいず」と呼ばれ、電子掲示板なるものに書き込みをすれば「もじばけ」と呼ばれ、コンピュータに入れば「ういるす」と呼ばれるようになった。

ヒト類と双方向のコミュニケーションを取れる日も近いであろう。

Y①第一人称（「―の勝ちや」他）

②座標平面の縦軸。どがいないと使い物にならない。単体ではただのY

③何故。Why.発音が下手くそな日本人に見られる、カッコつけた言い方

☆熟語

K・Y　…K「空気」・Y「読めない」人間を指す言葉。

この称号を得た大体の人間は、まじで空気読めない。

ずYがに　…カニの一種。おいしい。他は知らない

確か福井県産。

ハY　…太平洋に浮かぶ島で、言わずと知れた観光名所。

出雲大社の分社がある。

YプT　…TVのバラエティ番組などで使用される、小さく切り抜かれた部分。出演者の反応などを楽しむことができる。

Y藝物頒布罪…ひYな文書などを頒布等の目的で陳列する罪。うまくいけば2年以下の懲役または250万円の罰金にできる。

Y賂　…自分の利益に変えるためなどの、不正な目的で贈る金品。

今回、Y賂を送ったことは言うまでもない。

女子A「Yってやつ知ってるー？」
女子B「Y君？覚えてないなー。」
女子A「あの影薄いやつだよー！
高校でも全然目立って出でこなかった奴！
なんか左の方の真ん中ぐらいに居たやつだって！」
女子B「あー……なんか居たねー」
女子A「あいつWみたいに沸点高いんだよねー」
女子B「たしかに中々笑わなかったよね。W君は覚えてないなー。」
女子A「しかも、あいつの周りいつもOがいてさー」
女子B「そうだっけ？O君なんかいたかな……？」
女子A「いたって！もう知らなさすぎ！」
女子B「もう忘れちゃったよ……で、Y君がどうかしたの？」
女子A「なんか最近の研究によるとね、Yって……」
女子B「え？！吉田君研究対象になってるの？」
女子A「え？」
女子B「え？」

――『イットリウムと吉田君』

祝い

乾いた冷たい風が、足元から這い登ってくる。歩を進める速度を速めると、程なくして通いなれた道に出た。遅くまで慣れない作業をやっていると、本当に疲れる。街灯と月明かりを頼りに自宅に戻り、玄関のドアを押しあけると、寒々とした暗闇が出迎えた。

「ただいま」

誰にでもなしにそう言って、鞄をおろし、シャワーも浴びずに布団に横たわる。うつらうつらしてきたところで、明日寝坊するとまずいことに気付いた。あわてて目覚まし時計を手に取る。0時11分。

ああ、そうか。今日は俺の誕生日なんだ。ぼんやりとした頭でそのことを認識する。たぶん、何もないだろう。寝て、起きて、いつも通りの一日だ。目覚ましをかけて、毛布をかぶった。

派手な音を立ててクラッカーが鳴り、テーブルに並んだ皿に紙吹雪を散らせた。机を囲む見知った顔はみんな笑顔で、そのうちハッピーバースデーの合唱が始まった。なぜかそれが終わらない。ケーキも出てこない。みんなの顔を見ると、顔がなかった。あれ、と思うと、なぜか真っ暗な空間で得体のしれない重いものを抱えてうめいている自分がいた――。

けたたましいベルの音で、現実がかえってきた。夢か。そりゃそうだ。俺はベルを止めようと腕をのばした。と、その視界がにじんでいることに気付いた。指の腹を目にあてがうと、しっとりと濡れた感覚。いい年して何考えてんだ。

頭を起こすためにシャワーを浴び、着替えを済ませた。だがなぜか、夢の事ははっきり覚えていた。いつもなら夢を見たことすら忘れているというのに。

悶々としながら出かける準備を済ませていると、玄関のチャイムが鳴った。

「宅配便でーす」配達員の元気な声がしたので、判子を持って出る。

送り主は母。でかいダンボールには、祖母の家で採れた野菜と、封筒が入っていた。封筒の中には5万円と、手紙。崩した字体で「誕生日おめでとう。少ないですがお祝いと、応援の品です」とだけあった。

そんなわざわざいいのに、と思って封筒を閉めなおしたとき、今度は確実に涙が頬を伝った。くそっ、どうして母親ってこうなんだろうな。

意外にも、俺の誕生日を知る人は少なくなかった。あとで知ったことだが、最近は携帯電話やSNSがそういうことを律儀に教えてくれるらしい。

「おはよー、お前、誕生日なんだって？　おめでとう！」

「よう、おめでと！」

「誕生日なんだって？　じゃあ今日はおまえんちで飲み会だな！」

「お前は飲みたいだけだろー？」

その日一日で俺はずいぶん笑ったが、そのたびに目の端を指で拭っていたのは気づかれなかったようだ。

ひたすら同じ道を通ってばかり
どんなに手を伸ばしても
他の場所には届かない
ゆったり歩くこともあれば
急いで走ることもある
僕が頑張っているときには
だいたい文句を言われる
いいさ
僕はいつも必要なわけじゃないから
でも
僕がいなかったら困るでしょ？
だから
たまにはこう言ってほしい
「ありがとう」
「君のおかげで快適だったよ」
毎回毎回
黙々と仕事をこなす僕のこと
忘れないでほしいな

ワイパー

本から顔を上げ、ゆっくりとこちらを見上げる彼女。昼休み、教室の隅の席にて。緑の黒髪が白磁の肌に流れ、その白と黒のコントラストが美しい。

「初めまして八重野百合さん。先生から現代文と古典以外赤点である貴女の勉強を教えるように依頼された山田有紀と申します。あ、僕もイニシャル同じだね」

Yの喜劇

八重野百合。いつも授業中であろうと本ばかり読む問題児。先生の説教も無視、わいわいと騒ぐクラスメイトも視界に入れない活字中毒者。三学期に入るものの、態度を改めない彼女に先生達は匙を投げ、しかしいくら高校とはいえ単位が落ちると問題なので、僕が学年主席とまつり上げられ頼み込まれたのである。

夕日が差し込む教室。ゆったりした姿勢とは対照的にページを繰るのは速く、桜色のブックカバーを付け大きな瞳で活字を追い続ける彼女に、僕は緊張しながら声を掛ける。すると八重野さんは鞄から「きのこの山」を取り出し、また読書の世界に戻っていった。

「賄賂は駄目、ちゃんと勉強しましょう」

そう言って数学を準備する僕を見て、表情は変わらないが残念そうに俯く。机を挟んで向かい合って座り、ノートに二次曲線を描くと、彼女はか細い声で呟いた。

「……何でこんなに歪曲しているの？」

「ううむ、グラフ描くの苦手でごめんね」

「……違う。グラフは直線じゃなきゃ許せない」

数学嫌い、フーリエ変換とか知らないと零す彼女。

「いや高校数学でフーリエ変換とか出てこないから」

「……この前数学書読んでいたら出てきた。疲れた」

ふと視線を遣ると教科書の代わりに鞄の中には「不思議の国のアリス」「時をかける少女」「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」など全く本を読まない僕でも耳にした事のある本と共に、どこの広告でも宣伝されなさそうな物まで、十冊以上入っていた。

「種類とか気にせず読み漁っているんだね」

「……本の世界は素敵。矮小な現実世界は嫌い。様々な事象や理想や印象や妄想が無限に広がっているの」

「へぇ、本当に読書が好きなんだね」

「……と思うじゃん？」

意外に砕けた表現に驚くと、彼女はいつもの無表情であった。しかしその頬は少し紅色に染まっていて。

「もしかして八重野さんって、意外とお茶目さん？」

＊＊＊

そんな日々が続き、初めは少なかった八重野さんとの会話も、次第に増えるようになった、ある日。

「……何で"a lot of"と"lots of"が同じなの？」

「〈沢山〉が沢山あっても〈沢山〉だからかな？

……そういえば君は普段何を話しているの？去年だと話題はなでしこジャパン優勝とかあったけど」

「……2011年の出来事といえば道尾秀介直木賞受賞」

「じゃあその出来事を誰かと語り合った？」

一瞬のフリーズ。初めは面白がって話しかけていたクラスメイト達も、次第に遠のいたのをふと思い出す。

「……話すのは、怖い。言葉は相手に正しく伝わるとは限らない。誰かに嫌な思いをさせたり、見当違いなこと言ってしまったりするのは、とても怖くて、薄ら寒くなる話。言葉は幾つも浮かぶけれど、本当に大丈夫かと考えている内に、話すのが怖くなっていった。本は確かに大好きでも、ただの逃げ道かも知れない。

……なのに何故貴方は私と一緒に居てくれるの？」

「一緒に居れば居るほど八重野さんの発見が一杯あって、嬉しかったからだよ。初めはクールで怖そうと思ったけど、むしろ今はちょっとした仕草や言葉たちが可愛いなぁと思う。それにちゃんと僕と喋れているじゃない。もっと自信を持って、皆と話してごらんよ」

するとがたっと音を立てて、八重野さんは立ち上がった。白いはずの顔は真っ赤で、自分の手に爪を食い込ませるほど手を握り締めつつ震えていたかと思うと、鞄から一通の手紙を手渡してきた。

「私に勉強を教えてくれてありがとう。
私とお話してくれてありがとう。
私の心の鍵を開けてくれてありがとう。
貴方のことが、好きです。　Y.Y.」

たった四行で書かれた、不器用な八重野さんの告白が、何故か途方も無く嬉しかった。きっと、僕も。

「僕のことを、好きになってくれてありがとう。

――――貴女のことが、好きです」

花が綻ぶように初めて咲いた彼女の笑顔は、神様からの最高のプレゼントだった。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	YY	3 pt	7 位	1 sp
		TAさん称するところの「ダブルピース」。 言われて思わずしぐさを真似してしまう。いかにもな瞬間をさっくり切り取って、ジャストフィットのフォントで表現していただきました。 シンプルでインパクト大、グッジョブな最終回表紙です。 特別賞：最後のレイアウト賞 from T班（レイアウトだから） イチオシフレーズ：「YY」		
02	KY	1 pt	10 位	1 sp
		２ばん、おなじみ正統派枠。 空気って何だよ、おかしいだろ！ うんうんそうだよね、とパワフルな主張に説得されます。 がんばれ青年、片っ端から水を差せ！ 応援したくなる熱さでした。 特別賞：空気読めてる点線賞 from QB班（主題が「KY」なことに対して、非常に点線が空気を読めていないことが空気読めてます。） イチオシフレーズ：「『KY』と言われても水をさすべきだ。」		
03	徹底検証：もしアルファベットの「Y」が無くなったら	20 pt	1 位	0 sp
		くすりくすりと小ネタの連打。 特に「ours」＝スーパー共産主義、が私的ツボでした。 ラスト、やや楽屋オチ加減なのが工夫の余地ありと思いましたが、小気味よく繰り出されるネタがヒットして最終回の圧勝首位、気持ちよく終われましたね。おめでとう!!! イチオシフレーズ：「AHOO!」		
04	別れる路と、交わる路	4 pt	4 位	0 sp
		「僕たちの人生は、確実に同じ方向に進んでるんだ」、いやもう恥ずかしいほどの王道、会長さんメッセージ。照れずに書ききったのは、この書き手さんならでは。TだってYだって、どんどん離れていくことに変わりはないのにね。 そっか、この元会長さん、鬱陶しい後輩をこうやって煙に巻く作戦だったのか！ ←誤読		
05	アルファベットによる人間の精神活動の考察	0 pt	11 位	2 sp
		WXY、あーたしかにね。文字列ですっと議論に引き込んでくれます。 そして、なんちゃってオチ。 なんか、がんばって書くぞと始めた文系レポートが睡魔に負けてよろよろと挫折してしまったみたいなユーモラスな展開は、驚異の8割バッターさんの最終作品でした。 特別賞：部分レイアウト賞 from R班 まさかのレイア		

		ウト賞 from X班（例の班が１をレイアウトにすると思ったので） イチオシフレーズ：「そう、女性の体である。」「WXY」		
06	出会いのY	0 pt	11 位	0 sp
		「このザマだよ」からあとの、別れちゃったのに未練満々な心境の描写が、ほんとに真に迫って、うんうんなるほどね、とうなずけます。もしや実体験か!? と思ったら案の定。 春の予感、復縁の兆し。おしあわせに☆		
07	白色矮星より	2 pt	9 位	0 sp
		宇宙人さんようこそ。形のない意思だけの存在が、「もじばけ」くんや「ういるす」野郎になって、ふわふわ侵入してきている。 壮大な宇宙ストーリーから引っぱってきて、なかなかに楽しい日常シーンへのつなぎでした。仲良しになりたいなら、邪魔ばっかりしないで課題もテストも手伝ってくれるといいのにね。 イチオシフレーズ：「形あるものは朽ちる」		
08	Y辞典	3 pt	7 位	1 sp
		フシギ。たった１文字「Y」を置き換えて伏せ字っぽくするだけで、こんな楽しい辞書になる。 言葉遊びのおもしろさを存分に伝えていただきました。 特別賞：Y班特別賞 from Y班（出題班としてYの出てきた回数が最も多いから）		
09	イットリウムと吉田君	10 pt	2 位	1 sp
		左の真ん中にいた目立たないヤツ、沸点高め。スレ違い女子会話。 化学ネタを学園モノにうまく組み立てて、「え？」くすくす後を引く楽しさでした。吉田君、シルバー・メダルとともに、今週のイチオシフレーズ大賞もゲットです、おめでとう!!! 特別賞：リケジョ賞 from Z班（Z班はリケジョネタがお好きなようなので） イチオシフレーズ：「え？！吉田君研究対象になってるの？」×３		
10	祝い	4 pt	4 位	0 sp
		心のどこかで繋がりを求めている。誕生日は、その確認の日。 主人公の職業やプロフィールがいっさい明かされないままに心情だけがくっきり大写しになって、しっかり読者の心をつかんでしまう。 もう、この作者さんの独擅場（←正しいほうを使ってみた）ですね。 イチオシフレーズ：「５万円」		
11	ワイパー	9 pt	3 位	0 sp
		ナイス着眼。ワイパー君のひたすらなけなげさが伝わってきます。いいなあ、こういうまっすぐさ。 最後に正体が分かって、ひとつひとつなるほどね、と納得。好感度大の仕上がりでブロンズ・メダルでした、おめでとう!!		

12	Yの喜劇	4 pt	4 位	4 sp
		いくつ見つけられるでしょうか。 さいごのさいごは総集編をご堪能いただきました。 最多特別賞の賑わい、おめでとう!! 特別賞：総集編賞 from S班（総集編ばっかあるアニメって見てると飽きるよね） がんばったで賞 from U班（今までのテーマが入っていたから） コラムキングダム総合優賞 from V班（お題がたくさん、わいもたくさん） 詰め合わせ賞 from W班（よく頑張った）		

www.columnland.net